

Title	宇佐八幡宮の祠官について
Sub Title	On the Shinto-Priests at Usa-Hachimangu (宇佐八幡宮)
Author	佐志, 傳(Sashi, Tsutae)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.168- 192
JaLC DOI	
Abstract	It is believed that the Usa-Hachimangu had long been enshrined as a native god in the Usa district, though it was only during the 8th century that people began to deify him as a national god. In the year 725 the Shrine was built for the first time, for previously they had only had the primitive megalithic form of worship. There are two kinds of gods, male and female, in the Hachiman God, Of the two, the Goddess had been worshipped from much older times than the male God by the Ogas 大神氏 in the Izumo circle 出雲系 and the Kara- shimas 辛島氏 who were naturalized Japanese. The male God was worshipped by the Usas 宇佐氏 a powerful family in Usa district. In the later period, those Gods and Goddesses were generally called the Usa-Hachiman-Shin. The Ogas and the Karashimas were both Shamans and accordingly, the Usa-Hachiman's primitive form was Shamanism. It was propagated to the central part of Japan soon afterward through those Shamans who communicated oracles to the people which gave considerable influences upon them. Finally the Hachiman-Shin from being a mere local god came to be worshipped by all the people, including the Emperors, as the National God.
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0172">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0172</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 宇佐八幡宮の祠官について

佐 志 傳

### 一 序言

わが國の古代社會において、歸化人の占める地位は、きわめて高いものであつたが、なかでも漢氏と秦氏はその双壁と看做されている。漢氏は竹内理三氏<sup>(1)</sup>や關晃氏<sup>(2)</sup>によつて極めて詳細な、かつ網羅的な研究がなされたが、秦氏は喜田貞吉氏<sup>(3)</sup>が長岡、平安遷都の景背として、その一面を明らかにした以外に見るべき論考が現われていない。

ところがこの秦氏の、わが國の神道に及ぼせる影響については、夙に精緻なる論説が發表されて飛躍的な進歩をとげていると言つても過言ではない。昭和十八年に眞野勝利氏<sup>(4)</sup>と半田康夫氏<sup>(5)</sup>によつて、秦氏の奉祀する神として稻荷神、松尾神及び宇佐八幡神が指摘され、また秦氏と因縁淺からぬ神として賀茂神と大三輪神が挙げられた。更に昭和二十五年には中野幡能氏<sup>(6)</sup>によつて宇佐八幡神と秦氏との關係は一層明確となつた。これら諸先學の勞作に對して新たな妄説をさしはさむ考へではないが、この關係を別の角度から考察して、再確認してみたいと思う。

今まで特に等閑視されていた宇佐八幡宮の、祭神とそれを齎きまつる奉祀集團との關係、或いはその祠官相互間の主導權あらそいにおける秦系祠官の動き等、秦氏が奉祀することによつて宇佐八幡宮自體がどのような發展を遂げることが出来たか、と言うような點を考へてみたい。

## 二 秦氏のまつる神

秦氏のまつる神として最も有名なのは伏見稻荷大社である。稻荷社の起源を語る最古の現存史料として山城國風土記逸文伊奈利社の記事のあることは周知の通りである。

山城風土記曰 伊奈利社 稱伊奈利者 秦中家忌寸等遠祖伊侶具秦公 積稻梁有富裕仍用餅爲<sup>レ</sup>的者 化<sup>ニ</sup>成白鳥 飛翔居<sup>ニ</sup>山峯 伊禰奈利生 遂爲<sup>ニ</sup>社名 至<sup>ニ</sup>其苗裔 悔<sup>ニ</sup>先過 而拔<sup>ニ</sup>社之木 殖<sup>レ</sup>家禱祭之 今殖<sup>ニ</sup>其木 蘇者得<sup>レ</sup>福 殖<sup>ニ</sup>其木 枯者不<sup>レ</sup>福

とある。この記述は西田長男氏<sup>(7)</sup>の指摘されるごとく卜部氏に傳來したものであり、殆んど同内容のものが當社の祠官である秦氏の所傳にかかる「神號傳并後附十五箇條口授傳之和解」<sup>(8)</sup>にも收録されている。

さてこの神名帳頭註、諸社根元記に載せる逸文が果して和銅六年に撰上を命ぜられた所謂古風土記であるのか、延長三年に勘進せしめられた風土記の逸文であるのか、はつきりしないため伴信友は後者によるものと斷定したが、今日の定説では所謂古風土記の逸文と解されている。<sup>(10)</sup>この風土記逸文の稻荷傳説には脱文があり、文意のよく通じない箇所もあるが、これと類型的な説話である豊後國風土記速見郡田野の餅の的説話を考え合せると推測することが出来る。稻荷傳説については多少の考えもあるが、本題よりはずれるので割愛することとして早速本論に入る。この稻荷社を秦氏が奉祀したということは、年中行事祕抄の上卯日稻荷祭事の條に

件神社立始祭始之由。慥無<sup>ニ</sup>所見<sup>イ事</sup>。但彼禰宜祝等申狀云。此神。和銅年中。始顯<sup>ニ</sup>在伊奈利山三ヶ峯平處。是秦氏祖

中家等。祓來殖<sup>レ</sup>蘇也。即彼秦氏人等。爲<sup>ニ</sup>禰宜祝<sup>一</sup>。供<sup>ニ</sup>給春秋祭等<sup>一</sup>。依<sup>ニ</sup>其靈驗<sup>一</sup>。有<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>奉<sup>ニ</sup>臨時御幣<sup>一</sup>。云々

とあり、二十二社註式によれば、「和銅年中」を「和銅四年」としている。この稻荷傳説は當社の創建以來祠官であつた秦氏の所傳であり、又秦氏も後に本家三家、別家八家に分れてそれぞれ家傳の説を主張したため、詳しく言えばおのおの異同を含んだ説話が在つたとも言える。ところがこの秦氏に對抗し御殿預職、目代職を世襲した荷田氏の四家は、又別の家傳を主張して<sup>(11)</sup>いる。しかしこの荷田氏家傳の稻荷社鎮座説も、西田長男氏<sup>(12)</sup>の考察される如く、あくまで秦氏の家傳を基礎とし、天智紀三年十二月條等を参照して對抗上創作したもの<sup>(13)</sup>に外ならない。

次に稻荷大社とともに秦氏の奉祀する神社として松尾神社が擧げられる。本朝月令に引く秦氏本系帳によると

正一位勳一等松尾大神御社者。筑紫胸形坐中部大神。戊辰年三月三日。天下坐<sup>ニ</sup>松崎日尾<sup>一</sup>。又云<sup>ニ</sup>日大寶元年。川邊腹

男。秦忌寸都理、自<sup>ニ</sup>日埼岑<sup>一</sup>更奉<sup>ニ</sup>請松尾<sup>一</sup>。又田口腹女。秦忌寸知麻留女。始立<sup>ニ</sup>御阿禮平<sup>一</sup>。知麻留女之子秦忌寸都

駕布。自<sup>ニ</sup>戊午年<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>祝。子孫相承。祈<sup>ニ</sup>祭大神<sup>一</sup>。云々

とあつて、大寶元年都理が宗像神を松尾に勸請し、社を建て都駕布を祝に任じたとある。後に松尾神は代々秦氏の齋き祭る神となり、遂には秦氏の氏神に當てられ、一方東の賀茂社と共に京都の守護神と仰がれるようになった。

さてここで眼を轉じて松尾社と並び稱せられる賀茂社の縁起に觸れてみたい。賀茂社創設に關しては山城國風土記逸文の可茂社の記載が最も古い史料であることは周知されており、又それが三輪傳説に見られる丹塗矢傳説の系統に屬することも古くから指摘されている。更にこの説話を本朝月令に引く秦氏本系帳によつて検討すれば、賀茂傳説で丹塗矢に感じて男子を産んだ女玉依日賣を、秦氏の女子に擬している。そのみならず、その丹塗矢に言及して

戸上矢者松尾大明神是也。是以秦氏奉<sub>ニ</sub>祭三所大明神<sub>一</sub>。而鴨氏人爲<sub>ニ</sub>秦氏之簪<sub>一</sub>也。秦氏爲<sub>ニ</sub>愛簪<sub>一</sub>以<sub>ニ</sub>鴨祭<sub>一</sub>讓<sub>ニ</sub>與<sub>一</sub>。故今鴨氏爲<sub>ニ</sub>禰宜<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>祭。此其緣也。

と言つて、これを松尾神に擬定している。その上鴨氏が秦氏の簪となつて松尾社へ入り、更に禰宜となつて仕えたとも述べていることは興味深いことである。

この秦氏本系帳に言う秦系賀茂傳説はその前文に風土記の賀茂傳説を引用し、次いで「妹玉依日子者。今賀茂縣主等遠祖也云々」と現存山城國風土記逸文に見られない一條を挙げ、その次にこの秦系賀茂傳説を掲げている。ここで賀茂傳説と秦氏の祀る松尾神とが關係づけられてくるのであるが、このような關係は果して行われたことであらうか。信友の說によるとこの秦系説話を全面的に否定して

是乃父母子愛之義云々など、なほもうべくしげにいひなせるは、もはら己が蕃種<sup>カク</sup>の卑姓なるを匿<sup>カク</sup>して、建角身命の神別とし、かへりて賀茂の氏人の社家の上に出むとかまへたる巧には、神をも神とおもひ奉らず、祖<sup>オヤ</sup>をも祖とおもはざる、いともにくむべき僞説になむありける

と云い、更にこの秦氏本系帳の記事は「舊く傳來れる本系帳に、後に狡黠なる氏人のありて、書加たるものなる事著し」と論難してはいるが、今問題としてゐる戸上の矢が松尾神であるという説に對して

但しその僞説の中に、戸ノ上ノ矢松ノ尾ノ大明神也。といへるのみは、しかすがにそのかみ社家の現しき傳説なるべくきこゆる云々

と註記して、その點だけは認めている。<sup>(13)</sup>

秦系賀茂傳説は風土記の賀茂傳説が玉依日賣とする女性を秦氏の女に比定し、賀茂河を葛野河と處を變えてはいるが、内容は全く同一と言つてよい。この點より眞野勝利氏は

即ち秦氏は鴨氏と關係を生じたるこの機會に、その祖が地神系なる如く傳裝せんとして、加茂の傳説を改作玉依姫を利用し、秦氏本系帳にあるが如き物語を作つたものである。

と主張されるが、このような意識的な動きが秦氏自身にあつたかもしれないが、少し強辯に過ぎるのではなからうか。この場合は肥後和男氏の考察されるように、<sup>(15)</sup>この種の説話は賀茂にのみあつて、他には絶対にありえないものだという一元説では理解されなれないと思われる。各地で、各氏族がこの種の説話を、自分達だけのものとして傳承し保存してきたものであらう。

以上のような點から、秦氏の傳える説話と風土記に載せられた説話、更に大三輪に傳える説話の一連の丹塗矢傳説が、各自別々に伝えられたものであることがわかる。そして賀茂氏が迎えられて秦氏の養子となつたという説話も、古くから賀茂氏と秦氏との間に通婚の事實のあつたことを物語っているものではなからうか。元來賀茂と松尾は御阿禮をたてることなどから推して、そこには共通の神婚感生傳説があり、兩社は古くから何等かの關係を有していたことを示している。

さてここで松尾社の祭神をたずねると、丹塗矢となつて玉依日賣も通じた神は、古事記よれば大山咋神であるとしており、もう一座はさきに引いた秦氏本系帳によれば胸形の市杵島姫神としている。賀茂社は上社に別雷神、下社に玉依日賣とその父賀茂建角神とを祭っている。大山咋神が又鳴鏑の靈形とも考えられているから、先きに引用したように信

友が偽説だと論じた秦氏本系帳の内で、賀茂傳説の松尾神だけを認めた理由もそこにあるのである。この大山咋神は出雲系の神であり、賀茂氏も出雲系の出と考えられる。松尾社の宗像神は天神系であるが、その主神に出雲系大山咋神を祭り、これを奉齋するのは歸化人の秦氏であつた。そして賀茂は出雲系三輪氏の傳える丹塗矢傳説を有し、秦氏は賀茂傳説と酷似する自己の傳説を傳承していた。しかも松尾神が賀茂の玉依日賣と通じたと語られ、實際には賀茂氏と秦氏とに婚姻關係を結んでいたであらうと考えられた。この賀茂と松尾の關係は三輪をも加えて、より大きな範疇に擴大されてくる。三輪の大神氏、賀茂の賀茂氏、松尾の秦氏が一つの説話を紐帶として關係づけられ、三輪と賀茂の説話にはいずれも玉依日賣という名の女性が登場して説話の中核をなしている。この出雲系の神と、それより起つたと思われる氏族と、説話に現われる玉依日賣との三要素が宇佐八幡の奉祀集團を考察する上に最も主要な因子となつてくる。

### 三 宇佐八幡宮の祠官

宇佐八幡神出現の際に最も大きな役割を果したと考えらる者に大神比義なる人物がある。宇佐八幡に關する最も古く、しかも内容が最も豊富である八幡宇佐宮御託宣集によれば

金刺宮御宇二十九年戊子

筑紫豐前國宇佐郡、菱形池邊小倉山麓、有<sub>ニ</sub>鍛冶之翁<sub>一</sub>、帶<sub>ニ</sub>奇異之瑞<sub>一</sub>、爲<sub>ニ</sub>一身<sub>一</sub>現<sub>ニ</sub>八頭<sub>一</sub>、人聞<sub>レ</sub>之爲<sub>ニ</sub>實見<sub>一</sub>行時、五人行即三人死、十人行即五人死、故成<sub>ニ</sub>恐怖<sub>一</sub>無<sub>ニ</sub>行人<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>是大神比義行見<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>人、云々（靈卷）とあつて、比義が三年間五穀を斷つて祈願したところ八幡神が顯れたとある。比義は託宣集に

夫比義者不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何國之人<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>辨<sub>二</sub>誰家之子<sub>一</sub>來<sub>二</sub>自然長生之道<sub>一</sub>衝<sub>二</sub>天山高<sub>一</sub>出<sub>二</sub>靈威神妙之底<sub>一</sub>氣宇淵深其形似<sub>二</sub>仙翁<sub>一</sub>（靈卷）

と言つて、出自不明としているが、要するに比義によつて八幡神は出現することが出来たのである。比義なる人物は託宣集の記事をそのまま肯定すると欽明朝から、和銅年間まで約一四〇年間も生きながらえ、まさに「仙翁」の形容にふさわしいが、後に大神を名のる者によつて八幡神は祀られているから、このような説話が起つたのも、八幡神出現に與つて力のあつた大神氏の、歴史的事實の反映と考えて差支えなからう。延喜式に

凡八幡神宮司。以<sub>二</sub>大神宇佐二氏<sub>一</sub>補<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>雜<sub>二</sub>補他氏<sub>一</sub>。（三、臨時祭）

とあり、承和十一年の宇佐八幡宮彌勒寺建立緣起にも<sup>(16)</sup>

定<sub>二</sub>大神朝臣宇佐公兩氏<sub>一</sub>任<sub>二</sub>大少宮司<sub>一</sub>以<sub>二</sub>幸島勝氏<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>祝禰宜<sub>一</sub>云々

とある。宇佐氏は言うまでもなくこの地方の土着の大氏族で、神武天皇東征説話以來の國造系氏族である。このような土着の宇佐氏が何が故に八幡神の出現に關與しなかつたのであろうか。如何なる理由によつて大宮司の職を大神氏に譲らなければならなかつたのか。この様な疑問を解決するにはもう少し時代を遡つて創建當初の祠官について觸れなければならぬ。

八幡宮の祠官で正史に現われる最も古い例は、續紀天平二十年八月の條に見られる祝部大神宅女と大神社女の二人である。次いで續紀天平勝寶元年十一月の條と、同年十二月の條とに見られる禰宜大神朝臣社女と、主神司大神朝臣田麻呂である。以上の三名はいずれも大神氏であり他氏の祠官の名は擧げられていない。正史のみによると内容にとぼしい

ので、託宣集を中心に二、三の氏族を取り擧げてみよう。

まず大神比義についてみると、先に引用した託宣集によつて分るように、欽明天皇二十九年の八幡神出現譚中にみられた。次いで和銅元年に八幡神が再び神威を現わしたので、比義が重ねて精進したことを託宣集は述べている。

四十三代

元明天皇元年和銅元年戊申

豐前國宇佐郡内大河流

今號ニ宇佐河

西岸有ニ勝地、東峯有ニ松木、變形多端化、鷹顯瑞、渡瀨而遊ニ此地、飛空而居ニ彼松、

是大御神之御心荒畏坐、往還之類遠近之輩、五人行即三人殺、十人行即五人殺、于時大神比義又來與ニ辛嶋勝乙目、兩

人絶、穀三箇年精進一千日（中略）

廿一代敏達天皇也

淳名倉太珠敷天皇御世、辛嶋勝乙目爲祝、爰乙目之妹黑比賣采女并御戸代己私治

田貳段進之、辛嶋勝意布賣爲禰宜、右人等自大寶元年以前住而奉仕矣、次辛嶋勝波豆米今爲禰宜ニ云々（靈卷）

これによると、比義と共に一千日の精進潔齋を勵めた辛嶋勝乙目は、敏達朝に祝となり妹の黒比賣は采女になつてゐた。更に同族の意布賣は禰宜に任ぜられ、和銅元年には同波豆米が禰宜職に就いている。更に石清水文書之に引く

「廣幡八幡大神大詔宣并公家定記」の寶龜四年三月十四日付（第三八六號）の八幡大神宮司解によると

右、吾社乃始祝大神朝臣比岐、次は宇佐公池守、辛嶋勝與曾賣三氏良、宇加波志久、我毛我も思比天宮司に競成事有、

ニ云々

とあり、比義（比岐）は八幡宮の最初の祝であつたらしい。このようなことから推して、大神比義が八幡神出現に缺くことの出来ない存在であつたことがわかる。この種の人物は屢々超人化されて物語られるから、「仙翁」的であるといふことのみを以て、比義の存在を否定し去ることは出来ないと思う。

比義の子に春麻呂がいるが、春麻呂の事蹟は全く不明である。大神氏系圖<sup>(13)</sup>によれば靈龜二年頃仕えていたといこうとのみ記されている。春麻呂の子に胤守、宅女、諸男の二男一女があり、胤守も全く記載がなく、託宣集にもその名を擧げないが、宅女は先に述べたように續紀天平二十年八月の條に社女と共に外從五位下に敘せられた記事がある。社女は胤守の子であり、宅女と社女は叔母姪の關係に當り、いずれも八幡宮の祝部であつた。宅女の名はその後正史にも、託宣集にも見られないが、禰宜社女は主神司大神田麻呂と共に朝臣の姓を賜つたことが續紀天平勝寶元年十一月の條に見られる。以上宅女、社女、田麻呂の三人がわが古代史上に宇佐八幡宮の祠官として現われる最初の例であるが、宅女はその後史上より消え去り、社女と田麻呂は宇佐八幡神の東上に隨つて平城京に至り、天平勝寶元年十二月にはこの兩名に叙位のことがあつた。

次に諸男は託宣集に

宇佐郡當<sub>ニ</sub>小倉山之坤<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>小山田之林<sub>ニ</sub>、元正天皇二年靈龜二年丙辰、大神諸男、辛嶋勝波豆米奉<sub>ニ</sub>隨大御神之御心<sub>ニ</sub>、立<sub>ニ</sub>宮柱<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>造小山田之神殿<sub>ニ</sub>致<sub>ニ</sub>祭祀<sub>ニ</sub>（靈卷）

と記して、靈龜二年波豆米と共に小山田社を建立した事をのべている。更にこの兩名によつて八幡信仰に及ぼした一番大きな影響は、養老四年隼人族征討の軍に薦枕を神體とする神輿をたてて隨い、その結果放生會の起源をなしたということであらう。同じく託宣集に

四十四代  
元正天皇御宇 治九年

第六年養老四年庚申、大隅日向兩國隼人等擬<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>傾<sub>ニ</sub>日本<sub>ニ</sub>之間、公家爲<sub>レ</sub>降<sub>ニ</sub>伏此凶賊<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>祈<sub>ニ</sub>申宇佐宮<sub>ニ</sub>之時、豐前國守

正六位上宇努首男人將軍奉<sub>レ</sub>請<sub>ニ</sub>大御神<sub>一</sub>之間、禰宜辛嶋勝波豆米爲<sub>ニ</sub>大御神之御杖<sub>一</sub>女官名也云々（薩卷）とあり、更に薨枕の神體を造つたのは諸男であると記している。

依<sub>レ</sub>之諸男奉<sub>レ</sub>刈<sub>ニ</sub>此薦<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>造<sub>ニ</sub>別屋<sub>一</sub>、七日參籠、一心收<sub>レ</sub>氣奉<sub>レ</sub>裏<sub>ニ</sub>御枕<sub>一</sub>、御長一尺御徑三寸、皆以<sub>ニ</sub>神慮<sub>一</sub>也、豐前守將軍奉<sub>レ</sub>請<sub>ニ</sub>大御神<sub>一</sub>、禰宜辛嶋勝波豆米爲<sub>ニ</sub>大御神之御杖<sub>一</sub>女官名也云々（靈卷）

この託宣集の隼人族叛亂の記事を正史に徴すると、續紀養老四年二月の條に

大宰府奏言、隼人反殺<sub>ニ</sub>大隅國守陽侯史麻呂<sub>一</sub>

とあり、翌三月の條に

以<sub>ニ</sub>中納言正四位下大伴宿禰旅人<sub>一</sub>、爲<sub>ニ</sub>征隼人持節大將軍<sub>一</sub>、授刀助從五位下下笠朝臣御室、民部少輔從五位下巨勢朝臣眞人爲<sub>ニ</sub>副將軍<sub>一</sub>、

とあり、波豆米や男人の名は見えないが、隼人の叛亂は歴史的事實と考えられるから、異族征討の軍に宇佐八幡の神輿を奉じて、禰宜が随つたということも充分理解される。

諸男の子は先に記した田麻呂で、社女とはイトコ同志であつた。田麻呂と社女に賜姓と叙位のあつたことは既に述べたが、位をさづけられた五年の後天平勝寶六年十一月、突然この兩名は藥師寺僧行信と厭魅をなした罪により配流の刑に處せられた。即ち續紀天平勝寶六年十一月二十四日の條に

藥師寺僧行信、與<sub>ニ</sub>八幡神宮主神大神多麻呂等<sub>一</sub>、同<sub>レ</sub>意厭魅、下<sub>ニ</sub>所司<sub>一</sub>推勘、罪合<sub>ニ</sub>遠流<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>是遣<sub>ニ</sub>中納言多治比真人廣足<sub>一</sub>、就<sub>ニ</sub>藥師寺<sub>一</sub>宣<sub>レ</sub>詔、以<sub>ニ</sub>行信<sub>一</sub>配<sub>ニ</sub>下野藥師寺<sub>一</sub>、

とあり、更に同二十七日の條には

從四位下大神朝臣社女、外從五位下大神朝臣多麻呂、並除名從<sub>ニ</sub>本姓<sub>ニ</sub>、社女配<sub>ニ</sub>於日向國<sub>ニ</sub>、多麻呂於多嶺嶋、因更擇<sub>ニ</sub>他人<sub>ニ</sub>補<sub>ニ</sub>神宮禰宜祝<sub>ニ</sub>、其封戸位田、并雜物一事已上、令<sub>テ</sub>大宰<sub>ニ</sub>檢知<sub>上</sub>焉。

とある。この事件により宇佐八幡は翌天平勝寶七年三月に八幡大神託宣として

神吾不<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>矯<sub>ニ</sub>託神命<sub>ニ</sub>、請取封一千四百戸、田一百四十町徒无<sub>レ</sub>所用、如<sub>レ</sub>捨<sub>ニ</sub>山野<sub>ニ</sub>、宜<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>返<sub>ニ</sub>朝廷<sub>ニ</sub>、唯留<sub>ニ</sub>常神田<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>神宣<sub>ニ</sub>行<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>（續紀）

と言つて、天平勝寶二年に受けた一品八幡大神の封戸八百戸位田八十町と、二品比賣神の封戸六百戸位田六十町のすべてを返上している。この事實より推して、社女田麻呂が行信と結托し、いつわりの託宣を發して封戸位田を奪い取つたものと考えられる。

この結果社女田麻呂は八幡宮の祠官を追放され、「他人」が禰宜職についた。彌勒寺縁起によると

次以<sub>ニ</sub>辛島勝久須賣<sub>ニ</sub>天平勝寶七年補<sub>ニ</sub>禰宜<sub>ニ</sub>爰雖<sub>レ</sub>經<sub>ニ</sub>數年<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>託宣<sub>ニ</sub>仍天平寶字七年解却<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>其子志奈布女<sub>ニ</sub>補<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>とあり、同様の記述は託宣集（威卷）<sup>(19)</sup>にも載せられている。辛島氏の系圖は見られないので、既に述べた祝乙目と妹采女黒比賣、禰宜意布賣、及び同波豆米等と、禰宜久須賣と娘同志奈布女との關係は全く不明であるが、いずれも禰宜祝に任ぜられているから同族であることは間違ひなからう。この引用文によつても窺われるように、禰宜は一度任命されても託宣がないと言う理由で簡単に解任されてしまうのである。祠官内部においてはその權力を官司が握っているから、解任したのは無論官司職にあつた者（この當時誰であるのか史料を缺いているので分らないが、何人かがその職に

就いたか或いはその権限を施行していたものと思われる）であろうが、神託を發するということに最大の特徴を有する八幡神の、對外的發展を約束するのは神託を伝える禰宜であつたのである。その故に神託を傳えない禰宜は、永くその職に留るべき何物もなく、逆にその神託が極めて効果的であつた場合には、主神の田麻呂が外從五位下であつても、禰宜社女には從四位下という比類のない高い位を賜つてゐる。

天平寶字七年に久須賣は禰宜の職を追われ、替つて娘の志奈布女がその後任となつたが、同時に辛島勝與會女が禰宜に、同龍麻呂が祝に任ぜられている。彌勒寺緣起に

廢帝天皇天平寶字七年、大御神託禰宜辛島勝與會女實龜七年七月廿五日以官符補之宣、（中略）因茲禰宜與會女祝龍麿等彌勒寺金堂

東方造堂二字號沙法堂、云々

とあり、託宣集（威卷）にも收録してある。更に同年押領使宇佐公池守が宮司職に就いた。託宣集（威卷）に

大炊天皇五年天寶字七年癸卯託宣

押領使宇佐公池守願我宮司者

依之擬任宮司之時又託宣

如舊久大神朝臣田麻呂禮亦召天宮司土成牟在流乎麻天者

とあり、<sup>(20)</sup>ここにはじめて國造系宇佐氏の祠官が史書に現われてくる。以上のようにこの天平寶字七年という年は、八幡宮において目まぐるしい程祠官の更迭があり、田麻呂社女なきあと九年にして漸く別の禰宜宮司體制が形作られた年であり、宇佐八幡宮史における一つのエポックと言えるであろう。田麻呂社女にとつて替つた池守與會女という禰宜宮司

は、これまでの比義乙目、諸男波豆米等とは全く別種の系列に屬する祠官である。創設當初から奈良時代後期まで、八幡宮の祠官で宇佐公を稱する者は、池守をおいて外に一人もないという事は注目に値すると思う。田麻呂と社女は共に大神氏で姻戚關係にあり、比義と乙目、諸男と波豆米はいずれも大神氏と辛島氏との結び付きであつた。そして池守はみずから望んで宮司となり、與曾女はこの年突然禰宜として現われてきたのである。東大寺要錄四に「中間正六位上辛嶋勝與曾女爲禰宜」。從七位下宇佐公池守爲神宮司」と記すのは、この頃のことであろう。

さて天平寶字七年の託宣に、天平勝寶六年に流された田麻呂を赦免させたいという意向を洩しているが、事件より十二年後天平神護二年十月に田麻呂一人許されている。即ち續紀に

授無位大神朝臣田麻呂外從五位下、爲豐後員外掾、田麻呂者、本是八幡宮禰宜大神朝臣毛理賣時、授以五位、任神宮司、及毛理賣詐覺、俱遷日向、至是復本位

とある。さきに禰宜という職掌は極めて安定性のない、浮沈の激しいものであると述べたが、この場合でも田麻呂一人許され、社女には何の沙汰もなされていない。社女の職掌と行爲とを考えると當然の處置とも言えようか。

この池守與曾女體制の時に道鏡事件は勃發した。神護景雲三年清麻呂は「我國開闢以來、君臣定矣、以臣爲君、未之有也、天之日嗣必立皇緒、無道之人、宜早掃除」という有名な神託を聴き、その託宣を奏上したところかえつて流されてしまった。彼がこの神託を受ける際、素直にそれを受けるには自己の學識經驗が許さず、大いなる抵抗を感じてそのことをまず最初に述べたところ、神異たちまちに起り、清麻呂は漸く神威を信じたという。後紀延暦十八年二月の條に

清麻呂祈曰、今大神所<sub>レ</sub>教、是國家之大事也、託宣難<sub>レ</sub>信、願示<sub>ニ</sub>神異<sub>一</sub>、神即忽然現<sub>レ</sub>形、其長三丈許、色如<sub>ニ</sub>滿月<sub>一</sub>、清麻呂消<sub>レ</sub>魂失<sub>レ</sub>度、不<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>仰見<sub>一</sub>、

とあり、これを託宣集（力卷）によつてみると更に詳細な記述がある。神護景雲三年七月十一日清麻呂は八幡宮に勅使として参拜し、まず寶物を献上したところ八幡神は

神吾<sub>禮</sub>貢進乃寶物<sub>半</sub>朝家乃御志<sub>奈利</sub>可請納之志汝加宣命<sub>乎半</sub>吾<sub>禮</sub>不可聞<sub>須</sub>爲既識畢者

という神託を下し清麻呂の宣命は聞くことが出来ない<sub>と</sub>禰宜が傳えた。そのため清麻呂は答えて

禰宜汝者女身也、清麻呂者男身也、汝傳宣不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>信者也、云々

と言つたので、禰宜は宮殿に向つて

御神、清麻呂卿所<sub>レ</sub>申頗有<sub>ニ</sub>此疑滯<sub>一</sub>利令<sub>レ</sub>顯<sub>ニ</sub>現菩薩身比丘并大小國王之形<sub>一</sub>天令<sub>レ</sub>修行天竺震旦日本國<sub>一</sub>之給<sub>布</sub>時<sub>幾</sub>奉<sub>レ</sub>隨遂<sub>ニ</sub>給仕<sub>一</sub>之四人之内我其一人之子孫也、自<sub>レ</sub>本利令<sub>ニ</sub>傳宣<sub>一</sub>女御<sub>須</sub>事非<sub>レ</sub>于<sub>ニ</sub>今日<sub>一</sub>須早令<sub>レ</sub>顯<sub>ニ</sub>形之給<sub>天明</sub>仁可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>朝天御返事<sub>一</sub>之御<sub>上</sub>也

と言つて、自分が由緒正しい家柄の出身であることの證明に、八幡神の顯現を請うた。すると

于時御寶殿動搖一時許也、御殿之上紫雲忽聳出矣、如<sub>ニ</sub>滿月輪<sub>一</sub>而出<sub>ニ</sub>御和光<sub>一</sub>滿<sub>ニ</sub>宮中<sub>一</sub>、爰清麻呂傾<sub>レ</sub>頭合掌奉<sub>レ</sub>拜<sub>ニ</sub>見之<sub>一</sub>顯<sub>ニ</sub>現御躰<sub>一</sub>即無止僧形御高三丈許也

とある。この邊の光景は後紀の記述にも窺うことが出来る。そして僧形となつて顯われた八幡神は清麻呂に對して

清麻呂卿汝不<sub>レ</sub>信<sub>ニ</sub>託宣<sub>一</sub>須女禰宜乃奉仕知元由否女禰宜者<sub>者</sub>諧受<sub>ニ</sub>職灌頂之位<sub>一</sub>布者<sub>乎</sub>撰仕<sub>奈利</sub>者

といつて、女禰宜の傳える託宣を信すべきことを説いている。

このような経緯を経て清麻呂は既に記した有名な託宣を奉じて復唱したのであつた。しかし託宣集に載せられた記述は、果してどの程度の眞實性を持つてゐるものであろうか。疑義を挿しはさむ余地は多分にひそんでいるようにも思へるが（特に神異の項など）、禰宜がすべて灌頂をうけていたという點は、社女を禰宜尼といい、又八幡宮が古密教と密接な關係にあつたこと等を考え合せると、極めて興味深い託宣である。

さて以上のように、東大寺盧舍那佛鑄造に際し神助を與えんという託宣を下して、一躍中央の國家神と飛躍していながら、田麻呂社女等の偽託によつて封戸位田をかすめ取つた事實が明るみに出され、爾來しばらく沈黙を守つていた宇佐八幡は、道鏡事件の託宣によつて、より以上の神威を發揮し、その基礎を益々鞏固にすることが出來た。ところがここに再び託宣の眞偽が問題となり、八幡宮にとつては極めて重大な不祥事件が勃發した。<sup>(22)</sup>

先に引用した「廣幡八幡大神大託宣并公家定記」には石清文書番號第三七七號から第三八六號にいたる十通の文書と、七通の文書斷簡を掲げており、託宣集にも載せているが、これによると寶龜四年正月二日豐前守和氣宿禰清鷹の解文に

右、頃年之間、八幡大神禰宜宮司人等、寄辭神託、屢有妖言、非止擾亂國家、兼有詐僞朝廷、前後國司未加糾正、宰牧之務豈如此乎、望請、上件官人、國司判官已上、俱向神宮、明定實否、事旨既重、不敢不陳、仍錄事狀、  
(第三七七號)

と言つて、永年八幡宮の祠官が神託に言葉を寄せて、屢々妖言を發して朝廷を惑わしているから、これ等祠官の適格か

否かを審かにするため、官人と下部の派遣を申請している。正月九日の大宰府の符によると、大宰少貳石川朝臣眞木の名で主神從七位上中臣朝臣宅成以下對馬卜部、壹岐卜部等九名を直ちに派遣している（第三七八號）。そして早くも正月十五日の和氣清鷹等の解文（第三七九號）によると、全部で五項目に亙り卜占されたが、第一に禰宜辛島勝與曾賣は偽託を發していたことがわかり、その結果第二に田麻呂の娘大神朝臣少吉備咩が禰宜に任用された。第三の天平神護二年に罪を許された田麻呂を再び宮司に任用する件は、卜食により吉という判定が下された。第四の課題には

遷落字  
敷

案前日託宣狀稱、大神大隅國故早欲所顯祀者、實敷、

とある。この「前日託宣」という託宣の内容は的確に擣めないが、次の卜占に關係のあることではないかと思われる。

即ち第五に

又日向大隅兩國海中作島者、大神吾不立作、他神所作、此神依不見祀、國家之爲屢起禍恠、宜早顯祀者、實敷不敷、  
という疑いのもとに卜した結果、「他神作島」であるという結論が出ている。ところが託宣集（力卷、薩卷）には神護景雲三年の託宣として

大隅國海中仁造留嶋爾爲幸行坐爾船乎願欲布者

と言う神託をかがげ、八幡神が大隅の海中に造つた島に行くための船を所望している。更に續けて

、依託宣三月七日下午ニ太政官符ニ稱、奉ニ八幡大神贓船ニ者、四月四日奉ニ船并幣帛使ニ從八位上中臣朝臣川守被ニ奉ニ幣之日  
神託宣

船亦一艘不<sub>レ</sub>足<sub>奈利</sub>二艘可<sub>レ</sub>有<sub>志者</sub>

という都合のよい託宣を下してはいるが、禰宜與曾女に位まで授けている所よりみると、朝廷では早速用意したらしい。即ち

使川守即言上之而被左大臣宣奉 勅稱、依神教者即以同年六月七日禰宜辛嶋勝與曾女給<sub>ニ</sub>從六位上<sub>一</sub>、爾時彼大隅之海中造嶋號之鹿兒嶋矣

とある。そして同年七月に清麻呂が參宮した折には

海中爾嶋作<sub>流故</sub>神祇乃威勢<sub>乎示且</sub>無道之衆生<sub>乎導及</sub>、自<sub>ニ</sub>他國<sub>一</sub>利發來<sub>倍岐</sub>賦<sub>乎反鎮</sub>牟我爲<sub>爾曾</sub>、然吾非<sub>ニ</sub>專作<sub>一</sub>須他神之營<sub>曾曾</sub>、是神宜<sub>ニ</sub>早呈<sub>志</sub>祀<sub>神祇</sub>毛悉率作<sub>留</sub>

と言う託宣を下して、海中の島は専ら他神が造つたものであると辯じているのは甚だ疑わしい。島へ下る爲に船を一艘望んでいた處に、もう一艘追加しても直ちに用意される模様であるし、與曾女に位を授けたりするのは、宇佐が中心になつて働きかけたものではなからうか。火山活動か地殻變動によつて海中に出來た島でも、神の意志によつて造つた島であると言う神託があると、それを素直に信じ込む時代であり、ましてやその造島に鎮護國家的意味を含ませれば、船の一艘や二艘は造作もないことであらうし、主唱者に叙位のことがあつても不思議はないであらう。因に、五年以前の天平寶字八年十二月に大隅薩摩兩國の堺、麿嶋信爾村の海中に沙石が自然と聚り三嶋をなしたという記事が續日本紀にあるから、櫻島火山の噴火によつて出來た小島を指しているのかとも考えられる。

少し脇道にそれたが、正月十五日に以上のような判決を下している。與曾女が禰宜職を追放されたがために最大の苦

境に立たされたのは、禰宜と常に行動を共にし、更に禰宜を巧みに利用して自らの地位を保持せんとする官司宇佐公池守である。池守は解文を奉上して

右、禰宜辛島勝與曾女、頃年之間、大神之禰宜、爲種々詫宣事、未申上朝廷、此每事僞欺不少、此即明知與曾賣僞詫、如是以僞奉欺朝廷、但池守者敢不預密詫狀、云々（第三八〇號）

と云つて、與曾女一人に罪を負わせ、池守はそのような密詫には關與しなかつたことを強調している。しかし正月十八日の清麻呂の解文（第三八二號）によると、禰宜與曾女と官司池守は解任され、禰宜には既出の大神朝臣小吉備賣（十才）と同田丸が、祝には辛島勝龍鷹（四十四才）が、又大官司には田鷹が就任している。

ところが一カ月も過ぎない二月十日の國司解（第三八三號）によると、八幡神の託宣であるとして、禰宜に與曾女、忌子に小吉備賣、同女悲賣、辛島勝阿古女、同豐比賣、大官司に多鷹、少官司に池守を就かせたいという意向を洩している。與曾賣は實際には二月七日、既に託宣を傳えており、國司や大宰府の命令など齒牙にもかけていない。その結果、三月十四日八幡宮は官司の解文（第三八六號）を奏上して

以大神朝臣比岐子孫、永定大官司門、以宇佐公池守氏爲少官司副門地、以辛島乙目氏爲禰宜祝門、  
と言つて、大宰府の裁決を完全にくつがえし、解任された與曾女と池守はそれぞれ禰宜、官司に返り咲いてしまった。

以上八幡宮祠官の去就を述べながら託宣の内容にも觸れてみたが、祠官のうち官司、禰宜、祝の職は宇佐、大神、辛島の三氏によつて占められていたことが分る。宇佐氏は宇佐公池守の名しか擧げられていないが、既に述べたようにこの地方の土着の國造系氏族である。

大神氏は多數の祠官を神宮に奉仕させているが、託宣集その他の史書に現われる者を擧げてみると、先ず八幡神出現の際に最も功績のあつた比義、次いで春麻呂、次いで胤守、宅女、諸男がある。宅女は八幡宮祠官で正史に初めて現われるうちの一人であり、諸男は隼人征討の際に祝として活躍していた。諸男の子に田麻呂があり、田麻呂は胤守の子社女と共に、八幡神が國家神として發展をとげる際の代表者であり、後に僞託を發したことが發覺して流罪に處せられたが、田麻呂一人許されて再び官司職を襲つた。その他寶龜四年に禰宜となつた田丸、祝となつた田麻呂の娘少吉備咩、同じく忌子となつた女悲賣があり、又同じく種麻呂は延暦九年八月二十二日、大官司に任ぜられている（託宣集國卷）。この大神を當地方では「おおが」と訓んでいるが、大和地方ではこれを「おおみわ」と稱している。言うまでもなく大和の三輪氏である。豐後の大神郷に大神氏の館跡と稱するものがあり、この地を大神氏發祥の地としているが、中野幡能氏の指摘されるように、<sup>(23)</sup>出雲系三輪氏の同族と考えてよからう。

次に辛島氏も大神氏に劣らず多くの祠官を送つてゐる。先ず大神比義と共にその名を現わす禰宜祝の乙目、次いでその妹采女の黒比賣、禰宜の意布賣、大神社女なきあとを襲つた久須賣がいる。この久須賣は託宣を傳えないため罷免されて、そのあとに志奈布女が任ぜられた。志奈布女と同時に與曾女が現われ、宇佐公池守と共に清麻呂と對決したり、大隅の海中に出來た島は八幡神の神威によると主張し、のち清麻呂にその禰宜としての適否を問われるなど、善きにつけ惡しきにつけ、その中心となつて活躍しているのは、さき大神社女と對比される。その他忌子の阿古女、同豐比賣、祝の龍麻呂等、九名の祠官を擧げることが出来る。さてこの辛島氏はいずれも勝の姓を有している。勝の姓を持つ者は概して歸化族と解釋されるし、<sup>(24)</sup>更に雄略紀十五年の條に

詔聚ニ秦氏ニ賜ニ於秦酒公。公仍領ニ率百八十種勝ニ奉ニ獻庸調絹縑ニ云々

とあるから、勝は秦氏によつて統率されていたことが窺える。そこで辛島勝は秦氏の歸化族であつたことが分つたが、それでは「辛島」は何に由來するのであろうか。現在正倉院文書の中に大寶二年の戸籍が残され、豊前國上三毛郡塔里、同郡加目久也里、同仲津郡丁里の戸籍帳に、秦部、勝を多く載せ、多い里では全體の九六パーセントに及ぶ歸化族をあげている。そこに記されている氏名には、地名を氏とした、例えば塔勝とか、丁勝という氏姓を多く見る事が出来る。これと同様に辛島勝も宇佐八幡宮西方約四軒の驛館村字辛島の、地名を冠した氏名であることに間違ひなからう。

以上のように八幡宮の祠官たる三氏はいずれも別個の系統の氏族であり、國造系宇佐氏、出雲系大神氏、それに蕃別の秦氏まで加わつていたことが分つた。そしてこの宇佐、大神の官司系二氏は、禰宜系辛島氏を共同のものとして、大神比義は辛島乙目と結び、大神諸男は辛島波豆米と結びつき、宇佐公池守は辛島與曾女と結托していたのである。田麻呂と社女の場合を除き、いずれも禰宜祝門の辛島氏と結びついているという事實は、表面的には八幡神の託宣を下すという特異性を裏書きするものであるが、實際には既に見られたような宇佐、大神兩氏の葛藤に捲き込まれて失脚したり、或いはその間を巧みに泳いで朝廷より位を受け或いは姓を賜つたりして、逆に自分の氏族の發展を計つていともみられる。ところでこれら三氏と宇佐八幡の祭神とはどのような關係にあるのであろうか。次にそのことに關して考えてみたい。

#### 四 祠官と祭神との關係

宇佐八幡宮の祭神には三座あり、第一神は應神天皇、第二神は比賣神、第三神は神功皇后を祀っている。併し第三神の神功皇后は弘仁十四年に社殿が初めて造られているから、宇佐八幡宮の原初的祭祀形態を問題とする時、その對照となるのは第一神と第二神のみである。そして第一神の八幡大神を應神天皇と擬定するのも、孝謙、淳仁兩朝の頃と推察されるから、八幡宮創設當時の八幡神は、該地方の一地方神、即ち該地方の氏族に祀られていた一氏神に過ぎなかつたであろう。ところで第二神である比賣神は玉依姫と考えられ、しかも宇佐八幡宮の奥宮とみられる馬城峯の大元山神社にはこの玉依姫を祀っている。玉依姫という名義の神には數種の神を擧げることが出来ることから、今日一般に巫女の最高の地位にあつたものが、轉化してシャーマンの要素を持つた女神の美稱と考えられている。宇佐八幡の根元的形態である比賣神信仰は、託宣を下す事にその特色を持つ原始信仰であつた。これを今問題としている奉祀集團からみると、大神比義は石清水文書にあるように初代の祝であり、大神氏は代々祝禰宜をつとめ、田麻呂の時代に初めて官司となり、又比義と共に祭祀に従事した辛島氏は、乙目以來すべて祝禰宜の門地である。一方比義は乙目祝の時は官司のような役割を果していたのではないかと思われる節もあるから、この宇佐八幡神の根本となる第二神比賣神を古くから祀り、これに奉仕して神託を傳えていたのは大神、辛島兩氏であろうと思われる。そして宇佐氏は男神の氏神を奉じてこの地方に蟠踞していたものと推察する。

託宣集は八幡神の出現を欽明朝に比定しているが、無論その正確な年代を指しているものとは考えられない。佛教と最も古い習合を見せた宇佐八幡が、佛教渡來の欽明朝の最後にその出現を擬したもので、出現の時期を今正確に知る術もないが、要する出現の際に比義が大きな役割を果したということは、宇佐大神兩氏の關係をみるとき極めて興味深い

點である。

大神氏と辛島氏は神託を發する比賣神を奉じて馬城峯にあつたが、該地方の最大勢力である宇佐氏との融合をはかり、宇佐氏の奉ずる男神（これを果して八幡神と云つたかどうか問題を残すが）を表面に出して第一神とし、大神氏の奉ずる比賣神を第二神として宇佐氏の根據地である現在神宮のある小倉山に出現したという説話を創作したのではあるまいか。この八幡二座が形造られた時以降の状態を八幡信仰と考え、それ以前の別個に奉祀されていた時期を宇佐信仰とする中野幡能氏の説はまさに卓見である。しかし兩氏族統合のために、新たに八幡神なる神を創つて、これを統一の紐帶として八幡信仰が起つたとする點は首肯出来ない。矢張りこの八幡神となる男神は、宇佐氏の奉ずる氏神で、これを第一神に祀ることによつて兩氏族の統合がなされ、又そうしなければ一大勢力である宇佐氏は統合に納得しなかつたのはあるまいか。奈良時代において宇佐氏の祠官として史上に現われる者は池守ただ一人で、しかもそれは田麻呂のなきあとの、官司空位時代に現われてくるのである。天平寶字七年を一つのエポックと考える意味もここにある。この兩氏は絶えず官司職を競望して相争つた経緯はさきに引いた石清水文書（第三八六號）にも表われているが、この状態は遂に統一されず、神宮寺においても八幡神宮寺と八幡比賣神宮寺は、別々に建立され後に彌勒寺、榮興寺となるが常に對立關係を持つていた。貞觀年間石清水に八幡が勸請されると、大神氏は極度におとろえ遂に大官司職は宇佐氏の獨占するところとなつた。

## 五 結語

以上によつて大神氏は出雲系三輪氏族であり、辛島氏は辛島という地名を冠する勝であるから、秦氏の一族であることがわかつた。さきに松尾社は秦氏によつて奉祀されていることを述べたが、松尾社の秦氏は出雲系賀茂氏と婚姻關係を結んでいたと考えられた。そしてその賀茂氏は三輪の丹塗矢傳説と同じ類型の説話を傳え、更に秦氏は三輪、賀茂の説話の中心である玉依日賣を秦氏の女とする又別種の丹塗矢傳説を傳えていた。一方宇佐では三輪系大神氏と秦系辛島氏が共に玉依姫とみられる比賣神を祭っている。宇佐には秦氏の傳える丹塗矢傳説を遺してはいないが、三輪の大神氏、賀茂の賀茂氏、松尾の秦氏の持つ一連の傳説に現われる出雲系氏族と玉依日賣、及びその玉依日賣を自己の一女姓とする秦氏、以上の三要素が又別の形をとつて宇佐にもみられるのである。即ち出雲系大神氏と歸化人の秦系辛島氏の祭る神が玉依姫であつたのである。そして半田康夫氏の指摘するように大寶二年の戸籍帳にみられる歸化人が鑛業に従事していたものであれば、宇佐の玉依姫が元來竈の原型を意味する鼎立せる巨石をヨリシロとする火神であり、又シャーマンは容易に鑛業神と發展出来ること等を考え合せると、玉依姫を祀る宇佐八幡の辛島氏の背景も明らかになると言えよう。(一九五八・六・一)

### 註

- (1) 「古代の歸化人」『國民の歴史』二の六所收、「古代歸化人の問題」『日本歴史』一〇號所收
- (2) 「倭漢氏の研究」『史學雜誌』六二の九所收

- (3) 『帝都』第十章、第十一章
- (4) 「謠曲と秦氏」『謠曲界』五七の三一六、昭和十八年九月—十二月
- (5) 「秦氏とその神」『歴史地理』八二の三、昭和十八年九月
- (6) 「宇佐八幡の發現に關する一考察」『西日本史學』三、昭和二十五年五月
- (7) 「稻荷社の本縁」四九〇頁『日本古典の史的硏究』所收、理想社、昭和三十一年
- (8) 『稻荷大社由緒記集成』祠官著作篇一八頁、伏見稻荷大社社務所、昭和二十八年
- (9) 「瀬見小河」凡例『伴信友全集』第二、二〇一頁、「驗の杉」同三四四頁
- (10) 肥後和男「賀茂傳説考」一四二—六頁『日本神話硏究』所收、河出書房、昭和十六年第四版、及び西田長男氏前掲書四九一—五〇三頁等參照
- (11) 荷田羽春滿筆「稻荷社由緒注進狀」『稻荷大社由緒記集成』祠官著作篇三三一—二頁
- (12) 「稻荷社の本縁」五二六—七頁『日本古典の史的硏究』所收、及び「荷田氏所傳の稻荷社縁起」二二〇頁『神道史の硏究』第二所收、理想社、昭和三十二年
- (13) 「瀬見小河」三之卷『伴信友全集』第二、三〇七—八頁
- (14) 「謠曲と秦氏」四「八幡と秦氏」『謠曲界』五七の六、昭和十八年十二月
- (15) 「賀茂傳説考」『日本神話硏究』二五五頁
- (16) 「石清水文書」之二『大日本古文書』
- (17) この記事は託宣集通卷にも引用している。
- (18) 『大分縣史料』第一部7「宇佐八幡宮文書之四」(小山田文書一)(五四六番)、昭和二十八年
- (19) 拙稿「八幡信仰の起源について」(史學三〇の二)において、この社女田麿の後任を與曾女池守としているのは誤であつた。ここに訂正する。
- (20) 池守が造宮押領使となつたのは、彌勒寺縁起によると天平神護元年三月二十三日とある。なお同年志奈布女を禰宜に、龍麿を

祝に任ずともあるがこの説はとらない。

(21) このことに關して昭和三十二年十二月七日、早稻田大學で開催された第五回早慶連合史學會において、「奈良時代における宇佐八幡の託宣について」と題する研究發表をしたことがある。

(22) 『東大寺要錄』卷第四によると「寶龜二年。和氣朝臣清麿任<sub>ニ</sub>豐前守。」とある。

(23) 註(2)にあげた論文參照

(24) 太田亮『全訂<sub>上代日本</sub>社會組織の研究』(邦光書房、昭和三十年)五三五頁に「勝姓は諸蕃氏が稱した姓で、皇別や神別にして勝と云つて居るのは特別の事情があつてである」とある。

(25) 拙稿「八幡信仰の起源について」本誌三〇の二參照

(26) 前掲論文